

2014年度
非文字資料研究センター / 沖縄県立博物館・美術館主催
第3回公開研究会

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界

日時：2014年10月26日（日）
13:00～18:00

会場：沖縄県立博物館・美術館 講堂
開会挨拶：安里 進（沖縄県立博物館・美術館長）
内田青蔵（非文字資料研究センター長）

開催趣旨説明：渡辺美季

報告：富澤達三（非文字資料研究センター 客員研究員）
豊見山和行（琉球大学 教授）
得能壽美（法政大学沖縄文化研究所 兼任所員）
川野和昭（南方民俗文化研究所 所長）

コメンテーター：①田名真之（沖縄国際大学 教授）
②津波高志（琉球大学 名誉教授）
③石垣博孝（石垣市文化財審議会委員長）
④本村育恵（青山学院大学大学院 博士課程）
⑤真栄平房昭（琉球大学 教授）

コーディネーター：渡辺美季（東京大学 准教授） 小熊 誠（非文字資料研究センター 研究員）

後援：浦添市美術館 石垣市教育委員会 名護博物館



〈公開研究会〉『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界

渡辺 美季

1. はじめに

2014年10月26日（日）、非文字資料研究センター／沖縄県立博物館・美術館の共催による公開研究会「『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編からみえる近世の奄美・沖縄の世界」が開催された。2014年3月に刊行された『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編の研究成果を広く紹介するとともに、その内容を多角的に論じることで、絵引研究のさらなる可能性を探ることを目的としたものである。計4本の報告とコメント・総合討論で構成された研究会には、センターの公開研究会史上最多となる約150名の来場者があり、絵引研究に対する関心の高さがうかがえた。

各報告の内容は報告者自身による紹介記事があるの

で、ここではコメント・総合討論の概要を紹介したい。

2. コメント

田名真之氏（コメント①）は「琉球交易港図屏風」（浦



会場の様子

添市美術館蔵)について、内容・年代・製作目的・製作者という4つの観点から考察を行った。特に製作目的に関しては同様の類図との比較検討から、薩摩(の士・商人・船員)向けに描かれた可能性が高いことを指摘しつつ、それにもかかわらずどの絵にも薩摩の在番奉行所(那覇にあった薩摩役人の駐在所)が描かれていないのはなぜなのか、そこにどのような意図があるのかを探ることが課題であると指摘した。

津波高志氏(コメント②)は「琉球寫真景」(名護博物館蔵)に描かれた相撲について、土俵およびチカラバンと呼ばれるふるまい料理を例に挙げ、過去から現在にわたる民俗事例との比較によって絵図の内容がより理解できることを示した。

石垣博孝氏(コメント③)は、「八重山蔵元絵師画稿」(石垣市立八重山博物館蔵)を含む八重山の文化財の概況を説明した後、画稿のかつての所蔵者である鎌倉芳太郎氏との出会いや、鎌倉氏が画稿を八重山博物館に寄贈するまでの経緯を、自身の体験をもとに披露された。

本村育恵氏(コメント④)は、「八重山蔵元絵師画稿」との比較という視点から、文献史料に見られる宮古島の絵師について紹介し、また「琉球交易港図屏風」に描かれた琉球の渡唐船を、東洋文庫蔵『亜細亜大観』第4輯4に収録された福州船の写真と比較検討し、渡唐船の船尾装飾の詳細を解明した。

真栄平房昭氏(コメント⑤)は、「琉球交易港図屏風」に描かれた那覇の^{かたばる}潟原における製塩風景(塩田と競馬)に着目し、文献史料(特に異国人が残した記録類)や写真・画像史料を駆使して、描かれた製塩風景を詳細に読み解いた。

3. 総合討論

総合討論はコーディネーターである渡辺美季が司会を務め、来場者から提出された質問票に基づいて進められた。質問は「澁澤敬三の時代と現在とでは『絵引』やその作成方法にどのような違いがあるのか」など絵引そのものに対するものから、「絵引では絵図が持つデフォルメやフィクションをどのように考えるのか」という絵図分析のスタンスを問うもの、また潟原の競馬の担い手、八重山の投網の方法、奄美の髪型の規則性の有無といった絵図の各部分の読み解きに関わるものなど多岐にわたり、活発に議論された。



総合討論の様子

絵引の可能性は、絵引が刊行され、多くの人の目に触れることになったこの段階から、本格的に開拓されていくものであろう。この公開研究会が、我々が世に送り出した絵引についての、さらなる議論の起点となることを願っている。

補則 (小熊 誠)

沖縄県立博物館・美術館での公開研究会は、渡辺美季先生と自分でコーディネーターを務める予定だったが、よんどころない理由で開催直前に出席がなくなってしまう。関係者には大変ご迷惑をおかけし、恐縮の至りであったが、それでも150名を超える参加者にお越しいただき、この公開研究会は大成功であった。

『日本近世生活絵引』の奄美・沖縄編は、それぞれの専門家によって作成されたもので、完成度は比較的高いと考えられる。そして、その図像から読み取れる情報はかなり多い。進貢船もあるが大和船もあるし、サバニもあれば伝馬船もあるというような、近世のその時代の歴史的事実を読み解くだけでなく、それらの木造船の構造などの違いを研究することもできよう。あるいは奄美の大和相撲の画像と現在行われている相撲行事の比較研究も可能である。これから、この絵引を利用して、近世の図像をフィールドワークすることが歴史学と民俗学の協働として可能である。

この公開研究会の続きを、3月21日に神奈川大学で開催予定である。この絵引を利用してどのような研究ができるのか、継続して検討していきたい。

末筆で恐縮だが、公開研究会でご発言いただいた方々、そして会場のご提供をはじめ様々なご協力をい



ただいた沖縄県立博物館・美術館にも改めて深く感謝の意を表したい。

報告1：絵引研究について

富澤 達三

1. 澁澤敬三の絵引研究

澁澤敬三発案の「絵引研究」の実作業は、有賀喜左衛門によると、まず澁澤家所蔵の中世絵巻の模刻本などから「常民」的な場面を選択し、画家（戦前は橋浦泰雄、戦後は村田泥牛）に模写を依頼し検討用の図像を作成した。それらを複製して検討し、番号を振って事物や行為に注釈をつけていった（『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第一巻、x～x iii）。

そして「一 住居」「二 衣服」「三 食事」「四 調度・施設・技術」「五 資糧取得・生業」「六 交通運搬」「七 交易・交易品」「八 容姿・動作・労働」「九 人生・身分・病」「一〇 死・埋葬」「一一 児童生活」「一二 娯楽・遊戯・交際」「一三 年中行事」「一四 神仏・祭・信仰」「一五 動物・植物・自然」の15項目が設定され、絵巻は場面順でなく、項目順に並べられた。

2. 「絵引研究」の継続

2003年、本学の「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が21世紀COEプログラムに選ばれ、澁澤の「絵引研究」を受け継ぐ試みが始まり、試案本5冊が出された。事業は日本常民文化研究所・非文字資料研究センターで継続され、「琉球交易港図屏風」「八重山蔵元絵師画稿」「琉球寫真景」の3作品を素材に、2014年春『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編が刊行された。

ところで、千葉正樹氏は『江戸名所図絵』の挿図分析から、近世図像の「絵から図」への変化、「絵と図の融合」等の変化を実証研究した（『江戸名所図会の世界—近世巨大都市の自画像』吉川弘文館、2001年）。

千葉氏は近世の俯瞰図・鳥瞰図的図像を以下の4視点に大別した。

- ①近景…対象から約10m以内の視点。男女の別・老若・身分・職業・各人の容貌・着物の文様まで描く。
- ②中景…対象から数十m。男女や老若の違いなどが簡略化されるが身分の判別などは可能。顔の表情は一本の線で描かれ容貌は省略。
- ③遠景…対象から100m以上離れた視点。人物の身分や職業は「武士＝刀二本差し」等の類型表現で描かれ、顔は白抜きとなる。
- ④超遠景…対象から数百m以上。広域の景観を描き、建物は簡略化、人物は縦の短線で描かれる。

千葉氏の分析にならえば「琉球交易港図屏風」は「③遠景」で描かれている。那覇港の景観・人々の暮らし・交易や祭礼場面が描かれ、情報量は極めて多い。「八重山蔵元絵師画稿」は「①近景」を基本とし、図的な線画で人々の老若・性別・身分や容貌が描き分けられる。浮世絵版画の「大首絵」を思わせる「超近景」による異国人の顔の図像もある。「琉球寫真景」は絵画的完成度が高く「①近景」～「④超遠景」の4視点を駆使し、奄美大島の景観・人々の生活場面を描いている。

3. おわりに

最後に、現在はデジタル技術の進化で、貴重な図像史料の詳細検討が可能となり、「絵引研究」が進めやすくなったこと、「絵引研究」は独力では困難であり、多くの専門研究者が共同研究で知識を共有し、分析視角を広げることの重要性などを指摘した。なお私自身は、「絵引」作成にあたり、澁澤が絵引研究に際して設定した、前記15項目を明確に意識していなかったが、試案本ではそれらがはからずも盛り込まれ、あらためて澁澤敬三の図像史料への視点の鋭さ・明快さを再確認した。



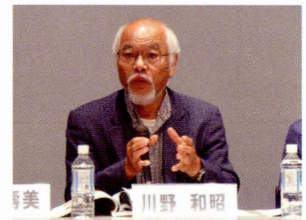
富澤 達三氏



豊見山 和行氏



得能 壽美氏



川野 和昭氏

報告2：琉球交易港図屏風からみる琉球の世界

豊見山 和行

琉球史の分野において、研究の素材となる史資料は豊富とはいえない。また、図像史料も限られている。しかし、図像史料は文字主体の文献史料にはない豊富な情報を有している。

筆者は図像学の知識は乏しいが、歴史研究の分野から琉球の図像について、次のような方法を用いる。図像そのものの読み解き、すなわち図像テキストそのものの読解と図像の外のテキストとを交差させて読み解くことである。具体的には次の作業を行った。

第一に、「琉球交易港図屏風」の全体的特徴として、主要な三つの行事（進貢船の帰国風景、爬龍舟競争（ハーリー）、湯原における競馬（馬寄せ、馬揃え）を中心に描かれたものであることを紹介した。

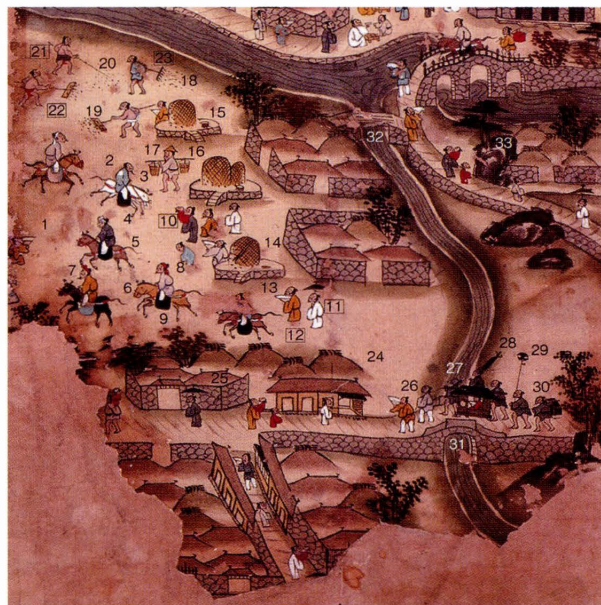
第二に、那覇のハーリーと遊女・商売・童子の弄物などを記載した書状（琉大附属図書館宮良殿内文庫「文書綴」、咸豊10（1860）年成立）を用いて突き合わせを行った。その書状（案文）では、爬龍舟競争の生き生きとした叙述や、それを見学する周辺間切からの多くの観客（野次馬）が天幕を設置し、あるいは小舟でこぎ出して応援していたこと、そして玩具売りに精を出す商人、華美な衣裳の女性たち（遊女）、赤覆面で舞う人々の様相など、ハーリーが那覇における祝祭的なものであったことを文献史料からも示した。

第三に、通堂で接待をうける薩摩役人の場面については、関連する那覇役人の日記（「玉城親雲上御物城日記」道光9（1829）年）などを用いた。また、首里城へ向かう在番奉行の一行については、「首里那覇港図屏風」（沖縄県立博物館・美術館蔵）を検討した。

第四に、図像の馬・競馬をめぐる問題について、船舶の入港時に騎馬で首里城へ急報することを「親見世日記」から示した。湯原での馬寄せの場面を理解する上で、同日記乾隆53（1788）年1月12日条から、

旧来の正月16日の馬寄せは「16日の墓参が盛んとなり支障が生じている」として正月20日へ変更されたこと、琉球王国末期には、正月21日が定日となったことを日記史料から示した。

図像史料をより深く読解する上で、文献史料との突き合わせは必須であること、さらに多様な視点からの分析には、多くの研究者の眼が必要であることを結論とした。



湯原における競馬の図（I-14 湯原）

報告3：八重山蔵元絵師画稿からみる八重山の世界

得能 壽美

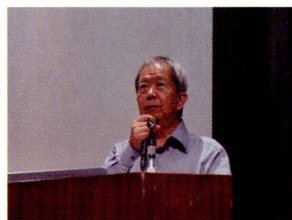
石垣市立八重山博物館蔵「八重山蔵元絵師画稿」は、1923年鎌倉芳太郎が琉球芸術の調査のために石垣島を訪れた際、最後の絵師となった宮良安宣の画稿を譲り受けたもの。全114点からなり、琉球王国末期から明治期の生活を描いた作品が多い。



田名 真之氏



津波 高志氏



石垣 博孝氏

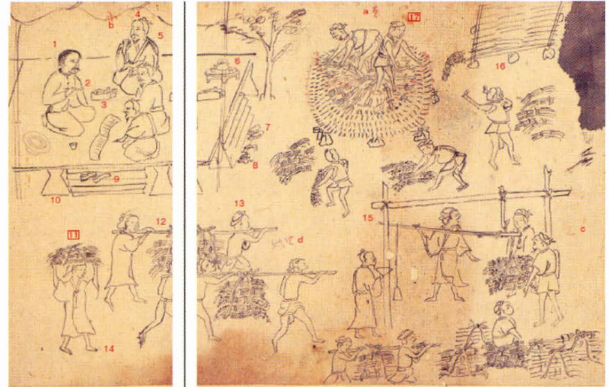


本村 育恵氏



これまで「八重山蔵元絵師画稿」を、八重山研究の資料として積極的に用いた論文などはあまり多くない。たとえば、近世八重山における生業は、『絵引』No. 27 に農業以外の多様な仕事がかかれていたが、実態としても分業されていない（専業漁民も不在）。さらに、近世の農業と人頭税に注目すると、No. 22 の稲刈りは、一家族の人数を超える多くの人が従事し、種々の理由から住居から離れた場所の水田とわかり、ユイによる遠距離通耕を示している。

No. 24 (右図) の図像を縦横に四分割すると、左上の棧敷での役人たちと右下の稲束の計量は人頭税の納入にかかわり、左下の運搬と右上の保存のためのシラ(稲叢)作りはもともと民衆生活の一部といつてよい。No. 25 俵の運搬と収納でも、右半分の役人と計量、左半分の俵の作成と運搬は、同様の対照である。



No.24 貢納と稲叢 (II-24 貢納と稲叢)

今回の『絵引』作成作業は、このような視点も与えてくれた。今後、より細部にわたって、八重山研究の資料として「八重山蔵元絵師画稿」が利用されることになるだろう。

なお、このほか八重山関係の画像資料に、①大島広写真資料(八重山博物館、蔵元絵師画稿)、②西常央関連資料(県立博物館・美術館)、③「八重山諸島村落絵図」(県立図書館)、④久場島清輝資料(八重山博物館)、⑤大田正義資料(同前)などがある。⑤は明治37年石垣生まれの大田正義氏の作品で、「昔の商店街」「石垣島測候所」「明治時代の八重山郵便局と電信局」など全31点からなる。当時の八重山博物館館長名城泰雄館長の依頼によって作成されたもので、画中に物の解説が注記されていて、すでに「絵引」を実践している。



渡辺 美季氏



真栄平 房昭氏

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編 正誤表

頁	誤	正	頁
14 (I-7- 解説文5行目)	1660年代頃	1680年代頃	110 (III-43)
25 (I-12-a)	a バクチャ	a バクキヤ	111 (III-43-3)
32 (I-16- 図中)	-	9 下部の10を削除	111 (III-43-4)
57 (「琉球交易港図屏風」図中)	-	⑯を図右下の缸へ移動	111 (III-43-6)
63 (II-19-a)	a 薩笠	a 藍笠	111 (III-43-9)
85 (II-31-3)	3 常緑の葉?	3 常緑の葉 雪松	116 (III-45 (1)) 左側下から2行目
158 (本文・右3行目)	バクチャ	バクキヤ	117 (III-45 (1)) 上から1行目
159 (2-(5)-③部分2)	b バクチャ	b バクキヤ	118 (III-45 (2)-7)
202 (索引)	常緑の葉?	常緑の葉 雪松	118 (III-45 (2)-21)

報告4：『琉球眞景』と奄美の民俗文化の世界
—「内的比較」と「広域的比較」による自文化の理解—

川野 和昭

『琉球眞景』は、名護博物館が所蔵する11景からなる絵図で、1987（昭和62）年琉球新報社から同社北部本社創立3周年を記念して寄贈されたものである。当初、その名称と、描かれた山がちな風景から沖縄本島北部の山原地域を描写したものと理解された。

しかし、琉球大学の津波高志の指摘によって、描かれている地域は奄美大島であることが明確にされ、その後、津波と名護博物館の比嘉武則らによって研究が進められてきた。

筆者は、それらの研究成果を高く評価しながら、津波が言う「琉球全体」との比較領域を東南アジア大陸北部の少数民族にまで広げた「広域的比較」と、比嘉が言う『南島雑話』との比較に、これまで民俗学が蓄積してきた奄美の民俗学的資料を加えた「内的比較」を試みることによって、『琉球眞景』は、初めて「アジアに開かれた奄美」、「日本という国境の枠を越える奄美」を示す可能性を主張している。

今回の那覇における研究報告は、その成果の一端であり、比較の指標となりうる描写の幾つかを取り上げて絵解きを試みたのである。第2景の萱の根本を内側に葺き込む高倉の屋根の葺き方、ハレコギ（爬龍舟漕競争）、第3景のバシャタバイ（芭蕉の茎の束）を額負うテイル（背負い籠）、女性が被るウックイ、サージと呼ばれる被り物、第5景のサタグルマ（砂糖搾り機）、それを引く馬や脇で草をはむ馬の頬に掛けられ

たオモゲ（制御具）、耕地を打ち返すトウゲ（唐鋤）、男性が着るウンジョウ（裂き織りの袖無し）、第6景の八月踊りの女性たちが持つチゼン（楔締め太鼓）、女性たちの結髪の五つの形、第7景の馬の着けたオモゲ、女性たちが被るウックイ、女性たちの背負ったテイルとその背負い方、カタボウ（肩に通した支え木）を使った木の運搬方法、漁婦りの男の担ぐイベラク（魚籠）、第8景の集落から離れたボレグラ（群れ高倉）などである。これらの民俗文化は、奄美、琉球の共通性を越えて、東南アジアの大陸部の少数民族の民俗文化と共通することが明らかになってくる。

さらに言えば、第9景の黒豚と耳に通した綱による制御方法はフィリピンとの関連性が指摘されるように、奄美の民俗文化の東南アジア島嶼部的性格を帯びた文化を描き出しているのである。

また、第10景の相撲の描写は、大和（日本）との関連が深く認められるというように、奄美のというよりも南西諸島はおろか、日本列島の文化の多様な構造を解き明かす可能性を持っていると言える。『琉球眞景』が、『南島雑話』とともに奄美の民俗文化の持つ多様な有りようを解きほぐす、極めて重要な民俗図譜としての非文字資料であることは動かしがたいことである。その前提に民俗学による地域資料の蓄積が不可欠の要素であることは論を待たない。奄美にとってまた自己の文化理解のための比較の視点を獲得したと言えよう。

誤	正
3、4、6の位置	右の図の赤字の位置に移動
3 テラヤマ	3 ユネシヤマ
4 名音〈地名〉	4 テラ
6 大和浜〈地名〉	6 名音〈地名〉 ノン
9 作小屋 ヤドリ	9 旧集落跡
ユカリッチュと呼ばれる上層階級の家と思われる。	こうした構造から、普通の民家ではなく薩摩藩士の駐在する仮屋であると思われる。
家主夫婦と見られる	景気づけをする役回りの
7 家主	7 景気づけをする男
21 家主の妻	21 景気づけをする女

